

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02781

研究課題名(和文) 中世室町語を源流とする長崎方言の文法的形式の成立と意味的変遷過程に関する研究

研究課題名(英文) The study on the formation of the grammatical form of the Nagasaki dialect, which originated from the medieval Muromachi language, and the process of semantic transition

研究代表者

前田 桂子 (maeda, keiko)

長崎大学・教育学部・教授

研究者番号：90259630

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：長崎方言の中には、中世室町時代の中央語の残存とみられる語形が散見される。本研究では中世、近世、近代の文字史料から推移を辿った。例えば、逆接の接続詞バッテンは室町時代の譲歩の接続助詞バトテから音訛形バッテンが成立し、意味が変遷した過程が明らかになった。また、現在の長崎方言では、専ら当為表現として使用されるンバはネバという条件表現から発達したものであり、終助詞パイは、同じく室町時代の中央語であるワの音訛形から発達したことが分かった。終助詞タイについてはタリから発達したと推定した。また、近世長崎方言と指摘のある語を中心に、日葡辞書と現代長崎方言辞書を比較して、方言の広がりについても概観した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

方言は古語の残存と言われるが、史料の制約から、証明することは難しい。しかし長崎方言は研究の余地のある近世史料が数多く残されている。本研究では、それらの史料から、従来明確にされてこなかった、古語から長崎方言が成立する変化の過程を明らかにした。

また、今回の研究成果として、新たな方言史料の発見があった。ローマ字で書かれた膨大な量の史料からは、今後、長崎方言の音韻や文法に関して、さらに詳細が明らかとなると期待できる。

研究成果の概要(英文)：In the Nagasaki dialect, word forms that are considered to be remnants of the central language of the medieval Muromachi period can be found here and there. In this research, I traced the transition from the medieval, early-modern, and modern written historical materials. For example, the reverse conjunctive "batten" was formed from the concessive conjunctive particle "batote" in the Muromachi period, and the phonetic form batten was established, and the process in which the meaning changed was clarified. In addition, in the current Nagasaki dialect, "-nba", which is used exclusively as an expression to be used, developed from the conditional expression "neva", and the final particle "bai" developed from "wa" which was also the central language of the Muromachi period. I found out. In addition, I compared the Japanese-Portuguese dictionary and the modern Nagasaki dialect dictionary, and surveyed the spread of the dialect.

研究分野：日本語学

キーワード：室町時代語 近世語 長崎方言 長崎史料 ドーフ・ハルマ 文法 音韻

1. 研究開始当初の背景

長崎は近世初期のキリシタンの日本語研究に始まって、その後のオランダ人や中国人などとの交流や、地方からの遊学者によって方言を記録した文献が数多く残されている。その記述が語彙や会話が中心だったこともあり、従来は語彙研究が盛んであった。しかしその後、近世の長崎・佐賀出身者による俗謡、滑稽本の散文資料など方言資料の発掘が徐々に進んで、幕末の肥前方言のモダリティや条件表現など、細かい表現性に関する研究の環境が整ってきている。大正から昭和にかけての資料としては、各地の郷土誌における方言記述や、各種音声資料、長崎出身者の小説作品など、様々な資料が存在する。明治期の長崎方言資料が十分に整っていないという問題点を抱えてはいるが、地元の博物館や図書館の歴史資料の発掘の余地があると考えている。

長崎方言の歴史研究の面では、自立語語彙のほか、文法面でも大まかな実態の記述はすでになされている。また、近現代の長崎方言の研究に関しては、愛宕八郎康隆氏による生活語を丹念に記述した各種論文を始め、語彙、文法、アクセントなど長崎方言全般を概説した著作もある。さらに現在、九州方言研究会を中心に現代九州方言の研究が活発に行われ、音韻やアクセント、条件表現などの認知言語学的な面も進んでいる。しかし、近世から現代に及ぶ通史的な文法研究は十分に進んでいるとは言えない。特に本研究が対象とする長崎地方の日常的な話し言葉として主要な位置を占める助詞・助動詞を対象に、成立や共通語との違いについて分析したものはない。申請者は上記の文献を中心として、聞き取り調査による現代用法を対照させながら長崎方言史に迫りたいと考えている。長崎方言は通史的な文献調査ができる数少ない方言の一つであり、特に文法研究は未開拓の分野である。以上のことから、本研究は新しい研究と言える。

2. 研究の目的

長崎方言には中世室町時代の文法的特徴の残存とみられる現象がいくつも指摘できる。従来、二段活用、助詞「ば」、動詞ウ音便などの語源に関する指摘はあるが、意味の変遷を含めた表現性の成立に関する研究は必ずしも進んでいるとは言えない。申請者は逆接の接続助詞バツテンが中世の逆接条件表現に由来することを明らかにしたが、同様に長崎における話し言葉の骨格をなす対格助詞バ、終助詞バイ、タイ、ヤ、接続助詞ケン、助動詞ゴタル、ゲナの成立過程と現代でも根強く使われている理由を突き止めたいと考えている。

3. 研究の方法

近世長崎方言の調査には、歴史資料の記述および俗謡や戯作作品を資料に、各年度のテーマに沿って用例を分析する。近世期は長崎地方の方言が記載された文献を調査し、大正期以降は郷土誌、方言書、音声資料および小説から用例を分析する。また、現代の使用状況はアンケート調査によって把握する。課題となっている明治期の資料は、研究の初期の段階から県内の図書館や博物館の文献調査を行う予定であるが、方言文献が発見できず、かつ当該テーマにおいて明治期に重要な変化が起こったと考えられる場合には、近隣の言語変化により類推する。各言語事象のデータを資料群ごとに年代別に並べ、地域別に言語変化の状況を分析することにより、変化の原因を探る。

4. 研究成果

長崎方言の中には、中世室町時代の中央語の残存とみられる語形が散見される。本研究では中世、近世、近代の文字史料から推移を辿った。例えば、逆接の接続詞バツテンは室町時代の譲歩の接続助詞バトテから音訛形バツテンが成立し、意味が変遷した過程が明らかになった。また、現在の長崎方言では、専ら当為表現として使用されるンバはネバという条件表現から発達したものであり、終助詞パイは、同じく室町時代の中央語であるワの音訛形から発達したことが分かった。終助詞タイについてはタリから発達したと推定した。また、近世長崎方言と指摘のある語を中心に、日葡辞書と現代長崎方言辞書を比較して、方言の広がりについても概観した。

本研究の意義は、以下の通りである。

方言は古語の残存と言われるが、史料の制約から、具体的に証明することは難しい。しかし長崎方言は研究の余地のある近世史料が数多く残されている。本研究では、それらの史料から、従来明確にされてこなかった、古語から長崎方言が成立する変化の過程を明らかにした。また、今回の研究成果として、新たな方言史料の発見があった。一部の調査の結果、ローマ字で書かれた膨大な量の史料からは、長崎方言の音韻や文法としての資料的価値が窺われた。今後、さらに詳細が明らかとなることが期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 トート・ルディ 前田桂子 原田走一郎	4. 巻 9
2. 論文標題 『ドゥーフ・ハルマ』初稿の初稿および『和蘭字彙』のC項目の対照翻刻	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 多文化社会研究	6. 最初と最後の頁 279-335
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二階堂整、門屋飛央、前田桂子、原田走一郎	4. 巻 33
2. 論文標題 五島列島方言の記述に向けた宇久町方言の調査報告	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 福岡女学院大学紀要	6. 最初と最後の頁 47-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田桂子	4. 巻 46
2. 論文標題 長崎方言資料としての『ドゥーフ・ハルマ』初稿本 A項目を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語と教育	6. 最初と最後の頁 30-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 トート・ルディ 前田桂子 原田走一郎	4. 巻 8
2. 論文標題 『ドゥーフ・ハルマ』初稿の初稿および『和蘭字彙』のF項目の対照翻刻	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 多文化社会研究	6. 最初と最後の頁 351-397
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田桂子	4. 巻 9
2. 論文標題 近世長崎史料における方言 ～日葡辞書および現代方言と比較して～	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 筑紫日本語研究2018	6. 最初と最後の頁 74-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田桂子	4. 巻 43
2. 論文標題 肥前方言の当為表現ンバ発達史 - 文芸作品を中心に -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国語と教育	6. 最初と最後の頁 35-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田桂子	4. 巻 2017
2. 論文標題 長崎方言バイ類の変遷について - 近世近代の長崎資料を中心に -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 筑紫日本語研究	6. 最初と最後の頁 8-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田桂子	4. 巻 7
2. 論文標題 肥前地方の当為表現「～ンバ」概観	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 筑紫日本語研究2016	6. 最初と最後の頁 38～47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田桂子	4. 巻 4
2. 論文標題 長崎大学武藤文庫蔵『涉濤日誌 二』 - 翻刻と解題 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 長崎大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 右1~17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 前田桂子
2. 発表標題 『ドゥーフ・ハルマ』初稿本A項目に見る長崎方言
3. 学会等名 筑紫日本語研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 前田桂子
2. 発表標題 九州方言終助詞タイの変遷 ~ 長崎史料を中心に ~
3. 学会等名 基盤研究(B) (19H01262推論過程の言語化におけるダイナミクスに関する研究:九州地方を中心に) 2020年度第1回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 前田桂子
2. 発表標題 長崎方言タイは、どこから来たか
3. 学会等名 筑紫日本語研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 前田桂子
2. 発表標題 長崎方言の終助詞パイの変遷について 近世近代の長崎史料を中心に
3. 学会等名 長崎大学国語国文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 前田桂子
2. 発表標題 近世長崎史料に見る方言 ~日葡辞書の下表記および現代方言と比較して~
3. 学会等名 筑紫日本語研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 前田桂子
2. 発表標題 近世長崎史料における方言意識 ~日葡辞書および現代方言と比較して~
3. 学会等名 国語語彙史研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 有田節子・岩田美穂・江口正・前田桂子
2. 発表標題 方言条件形式の多様性 -九州方言を中心に-
3. 学会等名 日本語学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 前田桂子
2. 発表標題 長崎方言のバイ類の変遷について - 近世近代の長崎資料を中心に -
3. 学会等名 第271回筑紫日本語研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 増崎 英明、長崎大学地域文化研究会（前田桂子、木村直樹、野上建起、他13名）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 九州大学出版会	5. 総ページ数 330
3. 書名 今と昔の長崎に遊ぶ	

1. 著者名 筑紫日本語研究会（青木博史、前田桂子、他19名）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 518
3. 書名 筑紫語学論叢	

1. 著者名 日高貢一郎、杉村孝夫、木部暢子、江口泰生、二階堂整、前田桂子、荻野千砂子、佐藤久美子、原田走一郎、門屋飛央、東寺祐亮、堀畑正臣、岡島昭浩、塚本泰造、森脇茂秀、勝又隆	4. 発行年 2020年
2. 出版社 創想社	5. 総ページ数 318
3. 書名 坂口至教授退職記念日本語論集	

1. 著者名 国語語彙史研究会（前田富祺、岡島昭浩、蜂矢真郷、前田桂子、他14名）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 和泉書院	5. 総ページ数 340
3. 書名 国語語彙史の研究三十六	

1. 著者名 平山 輝男、有元 光彦、前田 桂子、池田 史子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明治書院	5. 総ページ数 184
3. 書名 日本のことばシリーズ35 山口県のことば	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------